

助成事業実施報告書

団体名 特定非営利活動法人自立生活センター・昭島

代表者・役職名 氏名 理事長 吉澤 孝行

▼報告書の扱い、および記入にあたっての注意点

この報告書(精算報告書以外)は、ホームページなどで公開する予定ですので、広く読まれることを想定してご記入ください。また、編集段階で、表記・表現等を事務局で編集する場合がありますので、あらかじめご了承ください。語尾の表現は「です・ます」調をお願いします。報告書に掲載するため活動の内容がよくわかる写真(2枚程度。写真の肖像権問題がないものの提出をお願い致します)を添付して下さい。

1. 助成プロジェクト名

障害者の子育てに関する学習会

2. 実施団体の概要(創設の経緯、創設時期=法人で、法人化前に任意団体での活動がある場合、その段階からご記入ください。会員数など。180文字程度まで)

重い障害を持っている人が、地域で生活する為に必要なサポートを提供する為に、日本でも全国各地で、自立生活センターができており、昭島市に、任意の団体として、1997年10月に設立し、2005年11月に NPO 法人を取得した。主な活動内容は、移送サービス(福祉有償運送)、ピアカウンセリング等による自立生活、支援相談、障害者が参加活用できるプログラムの企画及び遂行など。

3. プロジェクトの目的とその背景(※応募申請書に記載のものでも可) 250文字程度まで

障害を持つ人の妊娠・出産や、介助者の手を借りての子育ては、一般的にはあまり知られていない。障害がある親の子育ても公的サービスの対象になっているが、子育てをする障害者の数は多くはなく、障害者に関わる人たちにも、あまり理解されていない。

また、出産や育児を希望する気持ちを持ちながらも、周囲の無理解や本人の無知・不安から諦めている障害当事者は多い。「障害者は子育てなど出来ない」という考え方そのものが、子育てをする力を奪っている。障害のある人も結婚や出産という選択が出来るようになって欲しい。

4. プロジェクトの内容(※当初予定と変更がない場合は、応募申請書に記載のものでも可) 300文字程度まで

○子育て経験のある障害者、子育てに関わる行政機関等へのヒアリング

○学習会開催

①自分のことも出来ない障害者が、子供を産んでどうやって育てていくの?～なぜ出産・育児をする障害者は少ないのか～

・女性差別、ジェンダー問題、障害女性の複合差別、優生思想等について学習した。

②視覚障害のある親とその家族の育児サークル「かるがもの会」の取り組み

・会に寄せられた相談事例を基に、当事者ネットワークの必要性を学習した。

③子育て出来る障害者は特別な?～支援を受けながら子供を育てるということ～

・6月に実施。3名の子育て経験者による体験談を通して、障害者が育児をするうえで必要なサポートや直面する問題を学習した。

5. プロジェクトの実施で得られた「結果」(OUTPUT。実施回数や参加者数など)、「成果」(OUTCOME。事業によって生まれた直接的な変化)、「社会的な変化」(IMPACT。事業が社会に与えた影響)などの『効果』 300文字程度まで

学習会参加者数:第1回12人、第2回9人、第3回30人。

障害当事者や障害者に普段関わる人たちだけではなく、大学関係者、保育士、市の子育て支援に関わっておられる方などにもご参加いただいた。参加者には優生保護法や障害者の育児ネットワークの存在などを初めて知ったという方もおられ、また保育士の方からのアンケートには、保育園での具体的なやり取りを今後参考にしたいとあり、障害者の妊娠・出産・育児について理解を深められた。第3回には東京新聞の記者の方も参加され、翌日の朝刊に掲載されたので、より多くの方々に障害者の子育てについて知ってもらえたと思われる。

6. プロジェクト実施にあたっての課題、今後の展望など 300文字まで

多くの方々にご参加頂けたが、現在子育て中の世代や、今後結婚等を考えていくであろう若い世代の参加は、残念ながら少なかった。告知方法についての検討が今後の課題。講師をお願いした方々や参加者から、今後もこういった機会を持ってほしいとの声があり、また、知的や精神障害の方の子育てなど、取り上げきれなかった問題も多々ある。今後も取り組んでいきたいと思う。

7. 参考資料

支援対象プロジェクトで作成したチラシ、パンフレットやマスコミで紹介された記事等は現物またはコピー、活動状況の写真などを参考資料として提供してください。

参考資料あり・特になし

子育ての苦楽 振り返る

昭島で学習会 障害ある女性3人



子育て経験を振り返る（左から）吉本典子さん、田淵規子さん、広瀬裕子さん
昭島市保健福祉センターで

障害者の女性三人がパネリストとなった学習会が二十四日、昭島市保健福祉センターで開かれた。台所に車のバックミラーを取り付けて娘の様子が分かるようにした、耳の聞こえない女性の工夫など、子育ての苦労や喜びを披露した。

学習会は障害者の相談事業などを行っているNPO法人自立生活センター・昭島（吉沢孝行理事長）の主催。三十人が参加した。耳が聞こえない広瀬裕子さん（五）は、銭湯で髪を洗っている間に一人娘が転ん

で泣いていたことに気付かなかったエピソードを紹介。そんな苦労があっても「妊娠してすぐこうれしかった」と話した。

下半身まひで車いす生活の田淵規子さん（五）は一人の息子を育てた。車いすでできがちな褥瘡に悩まされ、一年ほど入退院を繰り返し、その後はヘルパーに保育園の送り迎えなどをしてもらうようになった。「子育てを通じて地域とつながれた」と振り返った。

脳性まひの吉本典子さん（五）は男女四人の母親。妊娠した時に周囲から「育てられないから諦めなさい」と中絶を勧められた経験を

支援団体「周りの手借りて堂々と」

明かした。子育てはヘルパーの手を借りたが、どこまでヘルパーに頼むかなどで悩んだという。

コーディネーター役で国立市の障害者支援団体代表の殿村久子さん（六）は「こ

れから出産する若い障害者は周りの手を借りて堂々と子育てしてほしい。障害の有無にかかわらず、地域が子育てを助ける社会になってほしい」と話した。

（林朋実）

**2017年6月25日付
東京新聞に掲載されました！**